

## 高校生とその母親における対人関係価値の類似と差異

川下 維信

Similarities and Differences of Interpersonal Value between High-school Students and their Mothers.

Masanobu KAWASHITA

Fifty-two 2nd year senior high-school students (about 17 yrs. old) and their mothers (M=43.7yrs.) were tested by the forced choice technique of Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Value (KG-SIV). Six domains of interpersonal value orientation (Support, Conformity, Recognition, Independence, Benevolence and Leadership) were investigated. Boys and girls scored higher than their mothers in the domain of Recognition and lower in Conformity and Benevolence. The mean score of Leadership of the boys was significantly higher than that of the girls. The correlation coefficients were not significant between students and their mothers. The problems of mother-child relationship were discussed.

**Key words :** value study, interpersonal value, value orientation, mother-child relation, value succession  
価値観研究、対人関係価値、価値の方向付け、親子関係、価値の継承

### 1. 序 論

価値は元来経済学や哲学における概念であるが、心理学、社会学、文化人類学等の分野においても、重要な概念として用いられている。すなわち文化人類学者 Kluckhohn (1961)<sup>1)</sup>は、「価値は経験に対する選択的な指向性であり、それは行為の選択肢についての選択を組織立てることに影響を与えるはたらきをする。こうした指向性は認知的な形をとり、言葉で表現されたり、現にとられている行動から推論されたりするものである。」と定義している。社会倫理学者 Morris (1956)<sup>2)</sup>は「中庸・達観・慈愛・享楽・協同・努力・多彩・安楽・受容・克己・瞑想・行動・奉仕」という「13の生き方」を設定して、人間の基本的な生き方を質的に測定することを提案し、Allport, Vernon および Lindzey (1960)<sup>3)</sup>は「価値の研究」を著し、Spranger (1924)<sup>4)</sup>が「生の

形式 (Lebensformen)」として挙げた「理論・社会・政治・経済・審美・宗教」の6類型に対応する価値的態度を測定する尺度を作った。

このような価値が、対人関係においていかに現れるかという点に着目して、Gordonはそれを対人関係価値と名付け、対人関係における動機付けのパターン (motivational pattern) であると考えた。そして彼は対人関係価値尺度 (Survey of Interpersonal Value: SIV) を開発し<sup>5)</sup>、菊地 (1975)<sup>6)</sup>は、その日本語版 (KG-SIV) を作った。

本研究は、特に対人関係価値における母子間の関連に着目して、KG-SIVを高校生とその母親に適用した。仮説として以下のことが考えられた。価値観には世代によって差があり、完全に一致することは考えられないが、価値領域によっては子供に影響を与えているであろう。特に母親との間では、男子に比べ、同性であ

る女子においてその影響は大きいと考えられる。また、価値領域によっては先行研究から男女で違いの見られるものがあり、本研究でもそれは支持されるであろう。本研究では、これらの諸点について検討し、青年の価値観形成における世代間効果を明らかにするとともに、臨床的応用への可能性をさぐる。

## 2. 手続きと方法

### <調査対象と調査法>

京都府立K高等学校普通科2年に在籍している生徒(男子161人、女子216人、計377人)から男女それぞれ60人、計120人をランダムに抽出し、生徒とその母親、計120組240人を調査対象とした。郵送法で親子それぞれにKG-SIVへの回答を求めた。回収数は男子26組、女子27組、性別不明1組の54組で回収率は45.0%。その中から性別不明の1組と記入に不備のあった女子の1組の計2組を除き、男女それぞれ26組、計52組について検討。母親の平均年齢は43.7歳であった。調査は1994年10月1日から7日にかけて実施した。

### <KG-SIV(Kikuchi-Gordon Survey of Interpersonal Value)について>

これは、個人と他の人々との人間関係に含まれている6つの価値を簡便に測定するために作成された尺度である。ここでいう対人関係価値は、個人が対人的な関係で抱く基本的な動機のパターンであり、次の6つの領域(domain)に分類される。

- (1)支持(Support:S) : 他の人々から理解をもって扱われ、勇気づけられる。親切や思いやりをもって扱われる。最大値30点。
- (2)同調(Conformity:C) : きちんとした規則に従い、社会的に当を得た行動をする。他の人々から受け入れられるような妥当な行動をする。最大値30点。
- (3)承認(Recognition:R) : 他の人々から尊敬や賞讃を受け、重要な人物として考えられる。他の人々の好ましい注意をひき、承認を受ける。最大値26点。
- (4)独立(Independence:I) : 自分の思うように行動する

権利を持つ。自分自身の決定を自由にする。自分独自のやり方で行動する。最大値32点。

- (5)博愛(Benevolence:B) : 他の人々のためになることをする。共に分け合い、不幸な人や困っている人々に助力の手を差し伸べる。寛大である。最大値30点。
- (6)指導(Leadership:L) : 他の人々の行動に責任を持つ。グループをリードし他の人々の上に立つ。リーダーとしての地位につく。最大値32点。

これら6つの対人関係価値の領域が、個人の中で相対的にどのような重要性をもつか測定するように構成され、回答は強制選択法で求められる。6つの価値領域を代表する90の質問は3項目ずつ組み合わせられており、被検者はこの3項目の中から自分にとって「より重要と思われるもの」「より重要でないと思われるもの」を選択して回答するようになっている。6つの価値領域の得点の合計は90であり、各下位尺度の得点は、その個人が6つの価値のどれを相対的に重視しているかを示している。

### <統計処理>

得られたデータは、価値領域ごとに得点化し、R(承認)、I(独立)、L(指導)の各価値領域については、最大値を30点となるよう修正してから、男子と女子、男子とその母親、女子とその母親、男子の母親と女子の母親の間でt検定を行なった。また、各価値領域のSIV得点についてピアソンの積率相関係数を求めた。

## 3. 結果

親子のSIV得点の平均と標準偏差を表1に示す。高校生男子、女子、母親について、それぞれの価値領域の得点を比較してみると、高校生は男子ではS(支持)とB(博愛)が、女子ではS(支持)とI(独立)が相対的に高く、母親ではC(同調)、B(博愛)が高い。

高校生男子、女子とその母親について比較してみると、男子、女子ともに、母親に比べC(同調)、B(博愛)が低く、R(承認)が高くなっており、男子についてはL(指導)が高くなっていることがわかる。各

表1 各集団のSIV得点の平均と標準偏差

		Support (支持)	Conformity (同調)	Recognition (承認)	Independence (独立)	Benevolence (博愛)	Leadership (指導)
高校生男子	M n=26 (SD)	18.00 (4.67)	14.46 (4.06)	13.32 (4.36)	15.61 (5.48)	16.12 (5.79)	12.40 (4.37)
男子の母親	M n=26 (SD)	16.50 (5.01)	18.96 (3.00)	10.21 (4.04)	15.47 (5.92)	19.42 (5.39)	9.16 (3.18)
高校生女子	M n=26 (SD)	17.77 (3.95)	16.19 (4.31)	13.49 (5.86)	16.33 (4.86)	16.15 (5.40)	10.10 (3.73)
女子の母親	M n=26 (SD)	16.31 (3.06)	19.12 (4.79)	9.59 (4.87)	15.68 (5.63)	18.58 (4.80)	10.28 (3.91)

集団間のt検定の結果を表2に示す。

男子と女子ではL（指導）において5%水準で有意に男子が高く、それ以外では有意差は認められなかった。男子とその母親の間では、L（指導）が1%水準で、R（承認）が5%水準で男子のほうが有意に高く、またC（同調）が1%水準、B（博愛）が5%水準で有意に低かった。

女子とその母親の間では、R（承認）が5%水準で女子のほうが有意に高く、C（同調）が5%水準で有意に低かった。男子の母親と女子の母親の間では、すべての価値領域で有意差は認められなかった。

なお、親子間におけるSIV得点の相関を表3に示す。男子と母親では、有意ではないが、C（同調）において、低い正の相関が認められ、L（指導）において低い負の相関が認められた。その他の価値領域では相関は認められなかった。女子と母親では、有意ではないが、C（同調）およびR（承認）において低い正の相関が認められた。

#### 4. 考 察

高校生男子、女子ともに、S（支持）得点が相対的に最も高くなっていることから、他の人々から理解をもって扱われることを望んでいるのがわかる。まだまだ人から理解され、思いやりをもって扱われたい年齢といえる。またI（独立）得点が、男子女子ともに相対的に高い（男子で3位、女子で2位）ことは、この年齢が親からの分離独立の時期にあることを示しているのであろう。さらに女子においてB（博愛）得点が4番目と低くなっていることは、反抗期などと関係しているのかもしれない。この女子の価値傾向は、女子

大学生を対象にした武内（1993）<sup>8)</sup>の研究とも一致しており、この世代の女子の価値観を示すものとして興味深い。

母親の価値観については、C（同調）得点とB（博愛）得点が相対的に高く、R（承認）得点とL（指導）得点が相対的に低く、これは順位としては、武内（1985）<sup>7)</sup>（1995）<sup>8)</sup>にある1983年の母親のSIV得点と同じであり、この世代の母親の価値観として標準的なものといえるであろう。

価値観の類似・相違については、男子のほうが女子に比べ、L（指導）得点がありに高いことから、男子は女子よりもリーダーシップを重視していると考えられる。実際、男子には他の人々の上に立つような文化的圧力が女子より多くかかっており、そのことが男子の指導的価値を女子のそれに比べ高く評価させたのであろう。また、他の価値領域については有意差がみられないことから、これらの価値領域について性差はなく、高校生として類似したものであると考えられる。

高校生女子と母親の世代差については、高校生のほうがC（同調）得点がありに低く、R（承認）得点がありに高い。これは男子同様、青年期における自己を認めてもらいたいとの潜在的欲求が対人関係価値の得点に反映された結果といえよう。

女子と母親の価値観の関連については、先行研究ではほとんどの価値領域で相関がみられることが明らかにされているが、今回の調査では、それを支持する結果は得られなかった。このことについて、武内（1994）<sup>9)</sup>が1983年と1993年の女子大学生の価値観を比較し、父親との類似性の拡大を指摘している。時代の変化によって、母親の価値観が娘のモデルとなりにく

表2 各集団間のSIV得点のt値 (df=50)

	Support (支持)	Conformity (同調)	Recognition (承認)	Independence (独立)	Benevolence (博愛)	Leadership (指導)
男子と女子	0.19	1.46	0.12	0.49	0.02	2.01 p<.05
男子と母親	1.09	4.46 p<.01	2.61 p<.05	0.09	2.09 p<.05	3.00 p<.01
女子と母親	1.46	2.27 p<.05	2.56 p<.05	0.44	1.68	0.16
男子の母親と女子の母親	0.17	0.14	0.49	0.13	0.58	1.11

表3 親子間のSIV得点の相関係数(df=25)

	Support (支持)	Conformity (同調)	Recognition (承認)	Independence (独立)	Benevolence (博愛)	Leadership (指導)
男子と母親	-0.106	0.228	-0.009	0.133	0.005	-0.207
女子と母親	0.016	0.238	0.193	0.036	0.054	-0.020

くなっていることのあらわれと考えられる。

仮説の検証に関して、母親に比べ高校生は男女とも同調的価値を重視せず、承認的価値を重視していることが認められ、男子においては他に博愛的価値を低く評価し、指導的価値を高く評価する傾向も認められた。母親と子供の相関については、男子では同調的価値と指導的価値で、女子では同調的価値と承認的価値で、有意ではないが低い相関が認められた。また性差は、指導的価値についてのみ認められた。

青年期においては母親と子供の関係が重要ではあるが、同時に父親との関係も重要である。特に男子の社会化の過程における父親の役割について、この種の研究を進展させる必要がある。

### References

- 1) Kluckhohn, C.: The Study of Values, in Barrett, D.N.(ed.) Values in America. University of Notre Dame Press, London, 1961.
- 2) Morris, C.: Varieties of Human Values, University of Chicago Press, Chicago, 1956.
- 3) Allport, G.W., Vernon, P.E., & Lindzey, G.: Study of values, Manual and test booklet(3rd ed), Houghton Mifflin, Boston, 1960.
- 4) Spranger, E.: Lebensformen Niemeyer, 1924.
- 5) Gordon, L.V.: Manual For SIV, Science Research Associates, 1960.
- 6) 菊池章夫, L.V.ゴードン: 価値の比較社会心理学, 川島書店, 東京, 1975.
- 7) 武内信子: 価値観の親子間比較に関する研究, ノートルダム清心女子大学紀要9(1), 11-18, 1985.
- 8) 武内信子: 女子大生及びその両親にみられる価値観とその時代変化, ノートルダム清心女子大学紀要19(1), 129-133, 1995.
- 9) 武内信子: 価値観における親子間の類似性とその時代による変化, ノートルダム清心女子大学児童臨床研究所年報7, 56-60, 1994.